

氷風穴を歴史遺産として 後世に伝え継ぐ

長野県小諸市 氷風穴の里保存会

■はじめに

「どちらにお住まいですか?」「はい、氷(こおり)です」と答えると、「冷蔵庫の中に住んでいるんですか!」ひと昔前にはこのような会話になり、いつも落胆していました。

氷地区は、小諸市の西端に位置し、北斜面で平坦地が少なく、冬は日照時間が短い集落です。

氷という名の由来は、「牛に引かれて善光寺参り」伝説の名刹布引山釈尊寺に、諸国行脚で立ち寄られた弘法大師が名付けたという言い伝えによります。現在、住民は70名で、高齢化率47%の自然豊かな村です。

この場所には池に張った氷を切り出し、夏まで貯蔵できる風穴ふうけつがあります。風穴は、夏

に石積みの隙間から冷風が噴き出る地形によって生まれた天然の冷蔵庫で、電気のない時代には地域の大財産として活用されてきました。

江戸時代は貯蔵した氷を藩主に献納し、明治時代には蚕種貯蔵庫として活用され、蚕糸業の発展に大きな役割を担ってきました。その時代の氷風穴の貯蔵量は国内で常に上位の実績がありました。

しかし、蚕糸業の衰退や電気冷蔵庫が普及すると、貯蔵庫としての役割を終え、過去の遺産となり忘れ去られていきました。

■復活のきっかけ

氷風穴に光が当たったのは2014年のこ



風穴に来られた皆さんにボランティアがわかりやすくガイドをしています



とです。県建築士会と信州大学のゼミの学生が、まちの歴史と特性を掘り起こし、その魅力を再発見する活動で氷地区の調査を行い、忘れ去られていた集落の財産が本にまとめられました。

これがきっかけとなり、地域の財産である風穴を保存・活用し、「多くの人たちに知ってもらいたい」「氷風穴を後世につなぎたい」という強い思いが生まれ、2016年2月に有志により「氷風穴の里保存会」が発足しました。

活動が大きく動き出す

発足後、どのように風穴を保存・活用していくか住民にアンケートを取り、今後の方向性や将来ビジョンを作成しました。そして、会が発足して間もなく運命が大きく動き出しました。翌年に全国風穴サミットが小諸市で行われることが決定したのです。

サミット開催という試練を乗り越えて

開催は決定したものの、風穴に関する知識が十分になく、肝心の風穴施設も朽ち果てた状態であるなど様々な問題点が浮上し、解決するための取り組みが始まりました。最初に、風穴研究者を招いた学習会を開催したことで、冷気発生の仕組みなど知識を得ることができ



毎年恒例で落葉が終わった頃に風穴周辺の清掃作業を行っています



全国風穴サミット前に、集落入口に石標を建立し大勢の住民や建築士会でお祝いを行いました

ました。また、風穴所有者であった地元旧家に残されていた資料の提供を依頼しました。活動費は行政の補助金などを活用し、来客者の駐車場整備や荒廃した建物の撤去、安全に見学するための石積補強工事を行いました。また、のぼり旗の作成や集落の入口に県建築士会が設計した石標を設置、その他、サミット開催に向けて必要な準備に、外部組織や協力が加わるなど大きな支えとなりました。

サミット開催時は、全国から千人余が訪れ、氷風穴が全国に知られる機会になりました。また、このサミットをきっかけに、風穴に関心を持つ地区外の会員が急増しました。

活動を始めて気づいた地域の大切な財産

資料の収集や学習を通じ、氷風穴の歴史を知ることができました。それは、江戸時代に藩主に氷を献納したこと、明治時代に蚕種貯蔵の会社を設立し運営していたことです。歴史を知り、改めて風穴が地域の貴重な財産だと気付いたことで、本格的な取り組みが始まりました。

氷風穴の魅力を伝えるための取り組み

魅力を知ってもらうために、パンフレット、ポスターを作製し、各所で展示してもら



風穴をより深く理解するよう風穴学習会や講演会を定期的を実施しています

季節を通して集落に来場者を迎える

毎年春は、「植物観察会」を開催しています。風穴周辺は低温のため、高冷地に多い植物や

いました。風穴に関わる学習会や講演会を定期的に行い、令和4年には風穴の歴史証人4名による語りの会を開催し、貴重な証言を記録しました。その他にもホームページを作成し、氷風穴の情報やイベントの発信をしています。発信の効果で、新聞やテレビ、ラジオなどのメディアから取材を受けるまでになりました。

希少な植物が自生しており、特有の植物を見ようと多くの愛好家参加します。夏は、藩主に氷を献納した祭事に合わせ「氷風穴祭り」を開催して、大勢の方々に風穴の涼しさを体験してもらうイベントを行っています。秋は、住民と会員総出で風穴周辺の清掃活動を行い、寒くなり温度が下がる冬には、温かい空気が出る温風穴の案内をしています。

氷風穴は、近隣の子どものための地域学習や歴史遺産の学習の場として活用され、また日本ロングトレイル協会のコースにもなっており、通年で楽しむ人々が訪れます。さらに大学の研究や調査活動の場として活用されています。来訪者を迎える際には、会員が風穴ガイドを行い、シニア世代の活躍や交流の場にもなっています。これまで来訪者が少なかった集落に、多くの人が訪れ、認知されるようになり、13名で発足した保存会も、現在では会員90名となっています。

さらに、氷を貯蔵した頃の道具・蚕種を全国から運ぶために使用した木箱など貴重な資料の保存について、施設の建設資金や設置場所が課題となっていました。しかし、近くの宿泊施設から申し出があり、施設内の一角を提供してもらえることが決まり、令和5年11月に『氷風穴史料館』を開館しました。(今年2月に場所移転のため閉館中)

今後の展望

昨年度から新たな取り組みとして、近年の地球温暖化に伴い、国の機関による自然冷熱エネルギーの活用などを探る調査が始まっています。全国に数多くある風穴の中から氷風穴が選ばれ、メカニズム解明に向け、風穴内の温度や湿度、構造や地形、空気の循環などを3年間にわたり調査と実験をしています。

今後の活動として、風穴の歴史に学び、当会で調査し記録した温度データや食物を保存した際の糖度データなどを活用し、特性を活かした保存事業を検討しています。

最後に、この氷地区に生まれたことを誇りに思い、氷風穴を地域の歴史遺産としてこれからも末長く守り伝えていけるような活動をしたと考えています。

(氷風穴の里保存会事務局長 前田重雄)



氷風穴の魅力を伝えるためポスターも作製しました